

2024年6月の総評に代えて 高橋修宏

鉄琴の余韻のように春の雪

長谷川柊香（宮城県）

「鉄琴」（ビブラフォン）は、いつまでも残響のつづく打楽器。空気の震えを感じさせる「鉄琴の余韻」は、ふわりふわりと降りつづける「春の雪」のイメージにふさわしい。

まみどりのひかりに溺れながら往
く理学部棟の床やわらかい

さいう（石川県）

穏やかでありながら、どこか崇高とも呼べる情景の空気感を、そのまま捕捉したような作品。「ひかりに溺れながら」の措辞が、ひととき印象的だ。また、「理学部棟」という具体的な場所の提示も、作品の中で活きている。

ポケットに五臓六腑を吊りさげる

立花ばとん（東京都）

もちろん「五臓六腑」とは、人間の内臓のこと。それを「ポケット」に吊りさげるとは、人体の内側と外側が逆転したイメージなのだろうか。一見、シュールリアルでありながら、現在も進行する戦場では在りえる光景なのかもしれない。（けっして、テレビの報道では映されることはないけれども…。）

足あとの付かない森に来てしまう

松下 誠一（東京都）

そこは、人間の痕跡、さらには時間が消去された「森」なのだろうか。「足あと」という具体的な事物が「付かない」だけで、一転して非日常の気配が、その「森」に漂いはじめる。

だってあの坂は静かに裂けていた

小野寺 里穂 (神奈川県)

「だって」というカジュアルな言い方をしながらも、それに続く事態は不穏である。「坂」をはじめ、数多くの道が「裂け」、崩れ、分断された元日の能登半島地震のイメージさえ読み取ってしまった。

局員は

ボクの郵便はかったり

ボクの身長はかったりした

和泉次郎 (新潟県)

たしかに郵便局では、持ち込んだ荷物について大きさや重さを測り、その料金を決めている。だが三行目、俄にナンセンスな気配が立ち上がるもの見過ごせない感触が残る。もしや「ボク」は、自分自身を郵便で送ろうとしているのだろうか。

ピアノって冷たい海だって思う

azusa (京都府)

ピアノを「冷たい海」と捉える比喻が美しい。どこか、坂本龍一による硬質でありながら、叙情的な曲のイメージも連想させられた。

あの馬は犯罪者ではないけれど

鞭を打たれて疾駆している

貴田 雄介 (熊本県)

かつて、鞭で打たれる馬を見て発狂したと言われるニーチェ。そんな伝記的な謎さえ呼び出すような作品だ。「犯罪者ではないけれど」という眼差しには、ニーチェ同様、いわゆる人間中心主義から身をかかわそうとする振るまいも含まれているのかもしれない。

花嫁を束ねては火にくべる村

太代 祐一（神奈川県）

「花嫁」という言葉には、目出度いイメージでありながら、どこか、それに止まらない不穏さを感じてしまうことがある。そこには、かつて女性をモノとみなした〈ヨメ送り〉という始源の記憶さえ張り付いているのかもしれない。アリ・アスター監督によるミステリックホラー『ミッドサマー』のような気配を秘めた一句。

爪見ると

分かり合えない

境がある

余剰な卵（福島県）

いまや「爪」は、身体的な部分でありながら、ときに生活習慣や衛生観念、さらには美意識まで表わしてしまうようだ。もしや他者との境界、さらには分断というものも、はじめは極めてささやかな部分に顕現されるのかもしれない。

慰霊碑を撫でてまわる

足元の死者を知らずに

踏みつけながら

古林暁（神奈川県）

何より、二、三行目の「知らずに／踏みつけながら」が批評的だ。ときに、「慰霊碑」という立派なモニュメントを造るだけで充足してしまう人間社会。それに対しての、静かでありながら鋭利なプロテストか。

夏服のとてもきれいなよごれかた

大西 美優（広島県）

やはり「夏服」と聞くと、アーウィン・ショーの珠玉の短篇『夏服を着た女たち』を思い出してしまう。しかし、この一句では、その「きれいなよごれかた」。著名な作品タイトルからの、どこかアイロニックな転じ方が見事だ。